

第488回 史跡めぐり  
平成30年3月25日(日)

## 越ヶ谷宿のふるさと宮本町

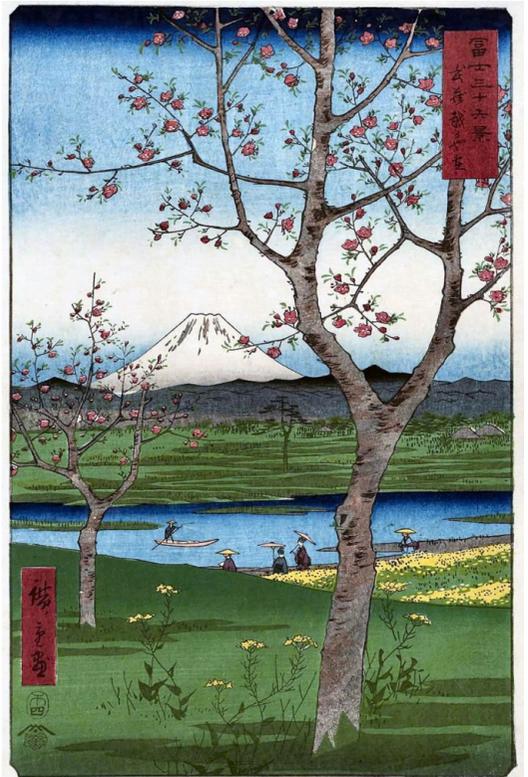
桜の花の咲く?元荒川に沿って、  
市内の神明町・宮本町などを歩きます。

順路 全行程 徒歩 約5.27 km

東武鉄道「北越谷駅」西口に集合 午前8時30分

- ① 大房稲荷神社(稲荷社) : 旧埼玉郡 大房村
- ② 出津橋・「文教大学」前 : 旧埼玉郡 大房村・荻島村
- ③ 桜の土手道 : 旧埼玉郡 大房村
- ④ 神明橋 : 旧埼玉郡 大房村・神明下村
- ⑤ 神明社(太神宮)跡 : 旧埼玉郡 神明下村  
トイレ休憩
- ⑥ 会田七左衛門家墓所・政重院跡  
: 旧埼玉郡 神明下村
- ⑦ 八雲神社(天王社) : 旧埼玉郡 神明下村
- ⑧ 三蔵院跡 : 旧埼玉郡 神明下村
- ⑨ 迎囃院 : 旧埼玉郡 四町野村
- ⑩ 薬王寺跡・薬師堂 : 旧埼玉郡 四町野村
- ⑪ 会田太郎兵衛(名主)屋敷跡  
: 旧埼玉郡 四町野村
- ⑫ 弘誓寺跡・疣稲荷神社(稲荷社)  
: 旧埼玉郡 四町野村
- ⑬ 十王堂 : 旧埼玉郡 四町野村
- ⑭ 地藏院跡・天神社 : 旧埼玉郡 四町野村  
トイレ休憩
- ⑮ 愛宕社跡 : 旧埼玉郡 四町野村
- ⑯ 中町浅間神社(浅間社) : 旧埼玉郡 四町野村

東武鉄道「越谷駅」東口で解散 午後0時30分頃



富士三十六景  
「武蔵越がや在」  
歌川 広重

◎案内者 常任理事 秦野 秀明・理事 尾川 芳男  
実行委員 逢見 俊人・河内 出・高橋 誠一

NPO 法人 越谷市郷土研究会



国土地理院「地理院地図（電子国土Web）」  
を加工して作成



国土地理院「地理院地図（電子国土Web）」  
を加工して作成



国土地理院「地理院地図（電子国土Web）」  
を加工して作成



国土地理院「地理院地図（電子国土Web）」  
を加工して作成

## 東武鉄道「北越谷駅」西口に集合 午前8時30分

しゅってん

※ 出典は以下のように、略して記しました。

- ①『新編武蔵風土記稿』は『風』
  - ②『武蔵国郡村誌』は『郡』
  - ③「文化七年（1810）五月 四町野村除地等書上」  
（「大門会田家文書」県立文書館蔵）は『会』
  - ④加藤 幸一「大袋地区の石仏」は『袋』
  - ⑤加藤 幸一「出羽地区の石仏」は『出』
  - ⑥加藤 幸一（1988）「元荒川（南荻島）出土の板碑群」は『荻』
- ※ ④⑤⑥は、「NPO 法人 越谷市郷土研究会」ホームページに掲載。
- ⑦平社 定夫・佐藤 和平（1993）『中川水系 総論・自然』は『中』

※ 越ヶ谷の元村はどこであったのでしょうか

〔前略〕 それでは越ヶ谷の元村はどこであったのか問題であるが、四町野村に二、三の興味ある事実がある。その一つは四町野の地名は本来耕地名であり、近世になってから村名に定めたといわれる。さらに四町野村迎檜院の寺号が越ヶ谷山神宮寺を称していること、また越ヶ谷の市神社は、寛永年間に四町野の神明社を移したものといわれ、もとは四町野の鎮守神であったという（大沢福井家文書「御用書留」）。さらに江戸時代を通じ、越ヶ谷の久伊豆社・浅間社・愛宕社がいずれも四町野村迎檜院が別当としてこれを管理し、かつこれらの境内敷地も四町野村の領分にされていたことなどが挙げられる。なおこの三社の境内敷地は社殿とともに、明治二十二年（筆者注 1889）の町村合併の際、入組地所の交換で越ヶ谷町の所有となった。したがって、越ヶ谷の元村は四町野であったとみてよい。

しかしこのことは、越ヶ谷村が全く新しい開発地域であったという意味ではない。[中略] したがって越ヶ谷には古くからの自然集落があったとみられるが、奥州道の宿場として新たに屋敷割りが行なわれ、越ヶ谷の地付百姓を中心に近在の住民が集まって形成された新興の宿場町であるといえる。そして当初を行政的には越ヶ谷村と呼び、また宿場としては越ヶ谷町と称したのである。

(出典『越谷市史 通史上』)

### ※ 公儀鷹場 拳場 (691ヶ村)

葛西筋 (223ヶ村) ・ 戸田筋 (72ヶ村) ・ 中野筋 (81ヶ村) ・  
目黒筋 (110ヶ村) ・ 岩淵筋 (137ヶ村) ・ 六郷筋 (78ヶ村)

(出典『江戸御場絵図』)

### 葛西筋八条領

越谷市内 (西方村・東方村・<sup>みたかた</sup>見田方村・<sup>なんど</sup>南百村・<sup>しじょう</sup>四 条村・別府村・  
<sup>せんびき</sup>千匹村・麦塚村・伊原村)

### ※ 紀伊家鷹場

<sup>とりみ</sup>鳥見役 会田 平左衛門の担当地域 (25ヶ村)

南部領 (14ヶ村) 下野田村・玄蕃新田・高畑村・中野田村・代山村  
寺山村・染谷新田・加田谷新田・上野田村・辻村  
大崎村・間宮村・北原村・戸塚村

見沼領 (1ヶ村) 片柳村・

赤山領 (2ヶ村) 久左衛門新田・藤兵衛新田

越ヶ谷領 (3ヶ村) 大間野村・七左衛門村・越巻村

八条領 (3ヶ村) 蒲生村・登戸村・瓦曾根村

岩槻領 (2ヶ村) 四町野村・谷中村

(出典「享保十年 (1725) 紀伊殿御鷹場村々石高覚 (文書番号 810) 」

『会田落穂集』)

※ 「村の一部」が紀伊家鷹場と書かれていますが「出典」が不明。

西方村・伊原村・西新井村・神明下村・越ヶ谷宿

(出典『越谷市史 通史上』)

## ①大房稻荷神社(稻荷社)：旧埼玉郡 大房村

『風』では旧大房村の鎮守(村を守護するために祀られた神の社)で、  
千手院せんじゆの持ちの「稻荷社」であることが、『郡』では寛保三年(1743)十  
二月に勧請された「稻荷社」であることが書かれています。

※ 「北越谷河畔砂丘I」(出典『中』)の北端の上に鎮座し、境内では、  
日本全国で45基(越谷市内で9基)しか存在しない「山王二十一仏  
板碑いたび」を見ることができます。

(出典 坂詰 秀一編(1984/1991)『板碑の総合研究 総論』)

「庚申塔こうしん」5基、「樗宮文字塔おうちのみや」1基、「弁財天石祠べんざいてん」1基、不明の  
「石祠」2基。(出典『袋』)

※ 「弁財天石祠べんざいてん」と、不明の「石祠」に、それぞれ「千手院宥せんじゆ□」、  
「別当 千手院せんじゆ」の文字が刻まれています。(出典『袋』)

## ②出津橋・「文教大学」前：旧埼玉郡 大房村・荻島村

※ 引き上げられた板碑群と大河の流路の変遷

昭和四十七年(1972)に、北越谷地区の対岸である南荻島地区の元荒川の  
川底より、康正三年(1457)から明応八年(1499)に至るまでの破  
片を含む30基以上の板碑群が引き上げられました(出典『荻』)。

北越谷地区において、「利根川」と推定される大河の流路は、「河畔砂  
丘かはん」の形成の過程により、「東」から「西」に移動したために、最後に板碑  
の建立された時(当時は右岸自然堤防の上)である明応八年(1499)以降

に、現在の元荒川の位置に流路が定まり、<sup>いたび</sup>板碑群が川底に没したと推定することができます。

(出典 秦野 秀明 (2011) 「往古奥州道と押立堤について」  
会報『古志賀谷』第16号) より引用して加筆。

### ③桜の土手道：旧埼玉郡 大房村

昭和三十一年 (1956) に、越谷町の有志によって植樹された桜です。

### ④神明橋：旧埼玉郡 大房村・神明下村

「下路トラス橋 (ポニー ワーレン トラス橋) 」×2 スパンです。

### ⑤神明社 (太神宮) 跡：旧埼玉郡 神明下村

『風』では神明下村の「<sup>しんめいした</sup>小名」は、<sup>こな</sup>在家、<sup>ざいけ</sup>沖谷、<sup>おきや</sup>松葉、<sup>まつば</sup>前方、<sup>まえかた</sup>後方で  
あることが書かれています。

『風』では旧神明下村の鎮守の「太神宮」であることが、『郡』では「神明社」であることが書かれています。

『出』では明治以前の「神明社 (太神宮) 」の所在地が、現・神明橋の西詰めの土手側から、大正年間 (関東大震災の前) に越ヶ谷久伊豆神社に合祀され、昭和二十七年 (1952) 一月に神明町 2-000へ移転し、平成十二年 (2000) に神明町 2-000-0の現在地に移転したことが書かれています。

「庚申塔」1基、「道標付き巡礼塔」1基。(出典『出』)

※ 「自然堤防」の分布から、かつての「荒川」の本流が、現・神明橋の北側付近で、現・元荒川に合流していたことを推定することができます。

※ トイレ休憩

⑥会田七左衛門家墓所・<sup>かなざわ</sup>金澤家墓所・<sup>しょうじゅう</sup>政重院跡

：旧埼玉郡 神明下村

『風』では宗派は<sup>しんぎしんごん</sup>新義真言宗、(旧)四町野村<sup>こうしょう</sup>迎攝院<sup>がっこう</sup>の門徒、月向山<sup>ごさい ほうみょう</sup>(後妻の法名)の山号、会田七左衛門<sup>まさしげ ごさい</sup>政重<sup>けいよ</sup>の後妻である慶譽<sup>むなふだ</sup>(元和八年(1622)六月二十三日に亡くなる)の追福のために造営(棟札には<sup>うらう きちじつ</sup>寛永十九年(1642)閏九月吉日とある)、本尊は<sup>しょう</sup>正<sup>まさしげ</sup>観音菩薩<sup>しゅごぶつ</sup>(政重の守護仏)であることが書かれ、『郡』では明治四年(1871)に廃されたことが書かれています。

※ 神明町の会田七左衛門家所蔵「天和三年 越谷神明縁起」には、

「於新墾田ヲ官領ス、號シテ七左新田ト謂ふ、政重之名ヲ取テ、永ク其ノ功ヲ忘レ不ルコトヲ示スト也、」

「寛文年中土屋但馬守始テ此ノ里ヲ采地ス、天和之初メ其ノ子相模守ニ抵テ、」

と書かれていることから、『風』、「正保国絵図」、「武蔵(正保)田園簿」、「元禄郷帳」に書かれていることを考慮しますと、

「旧・七左衛門村」の来歴は、

①寛文年中(1661～1673)までは、「幕府領」で、

村名が「新田槐戸村」。

②寛文年中から元禄十三年(1700)までは、「土屋領」で、

村名が「七左衛門(七左)新田」。

③元禄十三年(1700)からは、「幕府領」と「旗本領」で、

村名が「七左衛門村」。

であると推定することができます。

※ 会田七左衛門家の初代は、会田七左衛門<sup>まさしげ</sup>政重です。『越ヶ谷瓜の蔓』(『越谷市史 史料二』所収)によると、会田七左衛門家は政重が会田出羽資久の養子となった会田出羽一族で、神明下村に居住していたといひます。

伊奈氏の代々に出仕した会田七左衛門家は、地方史料と会田七左衛門家の墓所の墓石によって、会田七左衛門家の代々が推定可能ですので、詳しく知りたい方は、小沢 正弘 (2004) 『関東郡代伊奈氏の研究』 p. 539, 540 「表9の13 会田氏一族一覧表 (その2)」を参照して下さい。

※ 初代会田七左衛門政重の墓石の所在は残念ながら不明です。なお、会田七左衛門家の墓所には、著名な漢学者である亀田鵬斎の撰文による「素月居士墓銘」があります。詳しく知りたい方は、『越谷市金石資料集』 p. 79 を参照して下さい。

### ※ 越谷会田氏

越谷会田氏の事実上の祖である会田出羽資清の子会田出羽資久は、越ヶ谷宿を開発し、支配を徳川家康から任された人物であるが、その祖先は清和天皇に繋がる滋野氏から分かれた (裏付け史料なし) 信濃の豪族海野氏から、鎌倉時代前期に、会田氏と真田氏が分かれた。(「信州滋野氏三家系図」)

しかし、越谷会田氏の故地と比定される現松本市の「会田五ヶ郷」は、応永七年 (1400) 頃には既に、同じく海野氏から分かれた岩下氏 (会田岩下氏) (「信州滋野氏三家系図」) が支配しており (『大塔物語』)、越谷会田氏の祖先である会田氏は、行方知れずとなっている。

天文十九年 (1550)、小笠原長時の三男である貞慶は、岩下氏 (会田岩下氏) と真田氏のそれぞれの主君であった武田晴信により信濃国を駆逐された (『高白斎記』) が、天正十年 (1582) の武田氏滅亡後に徳川家康に仕え、小笠原旧臣の支持を得て深志城 (松本城の前身) を奪還し (『信府統記』)、同年、現松本市会田郷に侵攻し、武田氏旧臣であった岩下氏 (会田岩下氏) を、滅亡に追い込ませた (『四賀村誌』)。

現松本市の「会田五ヶ郷」を去ったと推測される越谷会田氏の祖は、会田将監幸久の代で関東に下り後北条氏に属したという (「会田家系図」)、将監幸久の子会田出羽資清は、太田下総守に属していたようで (「寛永諸家系図伝」、「寛政重修諸家譜」)、岩付城

主であった太田美濃守資正（三楽齋）から、後に越谷会田氏の「通字」となる「資」の字を授けられた（「会田家系図」）。

会田出羽資清の子会田出羽資久は、後北条氏に仕えるが（「寛政重修諸家譜」）、天正十八年（1590）、後北条氏没落後に関東に入国した後に、越ヶ谷地区に度々鷹狩に来ていた徳川家康に拝謁し、慶長九年（1604）には、自らの屋敷地の一部を「越ヶ谷御殿」の敷地として提供した（「寛政重修諸家譜」、「会田家系図」）。慶長十三年（1608）五月十八日には、徳川家康より屋敷地として畑一町歩を賜り（「慶長十三年伊奈備前守忠次指添状」）、元和五年（1619）七月十六日に亡くなり、越ヶ谷天嶽寺に葬られた。

会田出羽資清の子孫たちは、その後も越ヶ谷地区の礎を築き、<sup>こんにち</sup>今日の越谷市の発展に寄与したのである。

以上の文章は、

山崎 善司（1977）『越谷会田氏の研究』

<http://koshigaya-kkk.sakura.ne.jp/469.pdf>

山崎 善司（1985）『越谷会田氏のルーツを探る』

<http://koshigaya-kkk.sakura.ne.jp/468.pdf>

を、秦野 秀明が、要約した後、大幅に加筆しました。

かなざわぬいどののじょうすけゆき  
※ 金澤縫殿尉祐之は、本阿弥弥七郎兵庫忠福の二男で、役職・事績等は不明、地方史料に名前は無く、没年は文政九年（1826）三月二十七日の行年62歳、法名は「桃香院芳円祐之居士」で、菩提寺は不明。

（出典 小沢 正弘（2004）『関東郡代伊奈氏の研究』）を要約。

かなざわすけゆき  
※ 越谷の桃林と金澤祐之

〔前略〕『徳川実紀』の編さん者で著名な<sup>なるしまもとなお</sup>成島司直（文久三年85歳没）は、江戸近郊花見の名所として、杉田（現横浜市）の梅、小金井（現小金井市）の桜とともに越谷の桃を選び、それぞれの地を訪れ『看花三記』と題した紀行文を著している。司直が越谷を訪れたのは文化十一年（1814）二月の

末で、現在の大沢橋の手前を左に折れ（県道浦和・越谷線）、しばらく行って「祐之」（神明下・会田七左衛門家の一門金澤祐之カ）という文化人の宅で一休みし、祐之の馳走による小舟に乗って対岸に渡っているが、この辺りは「桃の花ならぬはなし、枝をもじえ陰をならべ、岡も野もただ紅の雲の中を往来する如し」とその見事さに感嘆している。〔後略〕

（出典 広報こしがや 昭和54年4月1日発行）より引用

⑦八雲神社（天王社）：旧埼玉郡 神明下村

『風』では村民の持ちの「天王社」であることが、『郡』では「八雲社」であることが書かれています。

「庚申塔」2基。（出典『出』）

※ 寛政五年（1793）「文字庚申塔」に、講中の一人として「金澤氏」の文字が刻まれています。（出典『出』）

⑧三蔵院跡：旧埼玉郡 神明下村

『風』では書かれていませんが、『郡』では明治五年（1872）に廃されたことが書かれています。

⑨迎攝院：旧埼玉郡 四町野村

『風』では四町野村の「小名」は、押切組 御繩先組 野尻村（加藤 幸一氏注「野尻組」の誤り）であることが書かれています。

『風』では宗派は新義真言宗、（旧）末田村金剛院の末寺、越谷山神宮寺の山号・寺号、天文四年（1535）に賢栄という僧が中興、本尊は阿弥陀如来であり、天正十九年（1591）に寺領五石の御朱印を賜ったことが書かれ、『郡』でも同様のことが書かれています。

「朱印状」及び『会』により幕府から所領が安堵あんどされ租税そぜいの免除及び収益の確保がなされる「朱印地」であることが判ります。

※ 『風』では「観音堂」があることが書かれ、その所在地は、迎摂院の北側入口付近にありました。

(出典『出』)

「庚申塔こうしん」2基、「出羽三山供養塔もくじきしょうにん」1基、「木食上人の文字塔ぞうじょう」1基、「七星氏の墓塔ななほし」1基、「宝篋印塔ほうきょういんとう」1基。芝増上寺から移転してきた「台徳院殿たいとくいんでん」と刻まれた「石燈籠いしどうろう」1基。(出典『出』)

※ 真言宗豊山派しんげいの総本山、奈良県初瀬の豊山長谷寺の第五世化主となった小池坊尊慶は、『豊山伝通記』によると、諱を尊慶、あざなを頼心と称し、俗性は会田氏、天正三年(1575)武州越ヶ谷に生まれるとある。[中略] また、四町野村迎摂院の過去帳によると、尊慶は、慶長十一年(筆者注 1606)から元和六年(筆者注 1620)まで迎摂院第五世の住職も勤めてい

る。  
(出典『越谷市史 通史上』)より引用。

⑩薬王寺跡・薬師堂やくおう：旧埼玉郡 四町野村

『風』では宗派は新義真言宗しんぎしんごん、(旧)瓦曾根村照蓮院しょうれんの門徒、瑠璃山東光院もんとうの山号・院号、文禄元年(1592)に長廣ぶんろくという僧が中興ちようこう、本尊は不動明王であることが書かれ、『郡』では明治四年(1871)に廃されたことが書かれています。

『会』により租税の免除された「除地じょち」であることが判ります。

「庚申塔」3基、「六地藏菩薩塔」1基、「不動明王文字塔」1基。

(出典『出』)

⑪会田太郎兵衛(名主)屋敷跡：旧埼玉郡 四町野村

『風』では**村民**の持ちの「**稲荷社**」があることが書かれていますが、  
『郡』では書かれていません。

『会』により**会田太郎兵衛**の持ちの「**稲荷社**」があり、租税の免除された  
じょち「**除地**」であることが判ります。

## ※ 太郎兵衛もちについて

[前略] 四丁 (筆者注 町) 野村 (現在の宮本町) の名主であった**会田太郎兵衛**が、もち米の改良に取り組んでいました。文献によれば、同氏が慶長元年 (筆者注 1596) に優良なもち米の選抜に成功し、周辺の農家に栽培が広がっていきました。このもち米は、作出した**会田太郎兵衛**の名を称して「**太郎兵衛糯 (もち)**」と呼ばれるようになりました。これが後に天下に名を馳せ、400年たった今も愛され続けている**太郎兵衛もち**の始まりです。

「コシが強く、粘りがあり、独特の風味がある」**太郎兵衛もち**は、明治から昭和の初期にかけて隆盛を極め、天皇家への献上の光栄に浴し、宮内省のご用を勤めました。また、昭和の初期には東京の和菓子屋が争って (筆者注 旧) 出羽村を訪れ、**太郎兵衛もち**を買い求めたと言われます。

しかし、戦時中食管法が施行され、政府への売り渡し価格が他のもち米と同じ価格に統制されました。このため、品質を誇り、倒伏しやすく、面積当たりの収量が少ない**太郎兵衛もち**を栽培する農家はごくわずかになってしまいました。

味は良いが収穫量が少ないことから生産が激減していった**太郎兵衛もち**を、何とか後世に残そうと、平成5年に越谷市が品種保存に乗り出しました。農家に**太郎兵衛もち**の栽培委託をするとともに、**太郎兵衛もち**の作付けを推進するための事業を展開しています。

また、**太郎兵衛もち**の保存・復活のため、平成10年から、**太郎兵衛もち**を栽培する生産者により「越谷市**太郎兵衛もち**協議会」(現会員10名)が組織され、400年の歴史を今に伝えようとがんばっています。

平成29年度には**太郎兵衛もち**の作付面積は43反となっています。

また、平成23年度には、「こしがやブランド」の認定も受けました。

(越谷市ホームページ (更新日: 2018年1月17日) より引用)

もちごめ

『郡』では「物産」として、「四町野村」で「糯米」が「三十七石」、

もちごめ

「神明下村」で「糯米」が「二十一石九斗七升」と書かれています。

でわのすけ まさゆき

### ※ 会田 出羽介 正之が作った出羽堀について

でわ

現在の出羽地区の「出羽」は、この地域に流れている出羽堀に由来します。

その出羽堀は、『新編武蔵風土記稿』によると、江戸初期にこの堀を掘った

すけまさゆき

会田出羽介正之より由来します。

会田出羽介正之は、越ヶ谷郷を開発した会田出羽家との説が一般的ですが、

ぜんじ

しちょうの

山崎善司氏によると会田出羽家ではなく、四町野村（現・宮本町）の名主、

もち

太郎兵衛糯で知られる会田太郎兵衛家の先祖で、会田七左衛門家の七左衛門

政重による開発「以前」に、出羽堀を掘ったと推定しています。

以上の文章は、

山崎 善司 (1991) 『四町野会田太郎兵衛家の先祖について』

<http://koshigaya-kkk.sakura.ne.jp/475.pdf>

を、加藤 幸一氏が、要約しました（秦野 秀明も加筆しました）。

『風』では以下のように書かれています。（加藤 幸一氏の訳）

ごおり

「埼玉郡之五 越ヶ谷領 越ヶ谷宿」

出羽堀 宿の 坤（南西）の方を流る、悪水堀を云、相伝ふ（う）、会

すけまさゆき

じゅう

田出羽介正之当所に住し、掘（堀）開きしをもてかく唱ふ（う）と、会田

うしろや

きゅうかどみ

えもん

氏のことは後 谷村旧家富右衛門の条、見るべし、

ごおり

うしろや

「埼玉郡之七 八條領 後 谷村」

「（現・八潮市にある 後 谷村旧家富右衛門の）会田系図を見るに、会田

まさしげ

じゅう

その

まさかた

三郎左衛門正重は、〔中略〕越ヶ谷の地に住す、其子若狭正方は太田十

うじふさ

うちじに

まさただ

まさゆき

いう

郎氏房に従て討死す、其子（長男）若狭正忠・二男出羽正之と云、正之も

越ヶ谷に住すとあり、今、越ヶ谷宿に（「正」が付くその三郎左衛門正重系

すいび

この

統の）会田氏の子孫なし、衰微して江戸に移れりと云、此（後谷）村に住む

富右衛門が家は、<sup>かの</sup>彼越ヶ谷に住せし三郎左衛門正重系統の會田氏が支族なりしや、」

⑫ <sup>ぐぜい</sup>弘誓寺跡・<sup>いぼ</sup>疣稻荷神社（<sup>いぼ</sup>稻荷社）：旧埼玉郡 四町野村  
<sup>ぐぜい</sup>弘誓寺について、『風』では宗派は<sup>しんぎしんごん</sup>新義真言宗、（旧）<sup>しょうれん</sup>瓦曾根村 照蓮  
<sup>もんとう</sup>院の門徒、<sup>せいりゅう</sup>清龍山<sup>ぶんろく</sup>観音院の山号・院号、文禄三年（1594）に<sup>そんせい</sup>尊清という  
<sup>ちゅうこう</sup>僧が中興、本尊は<sup>せんじゆ</sup>千手観音菩薩であることが書かれ、『郡』では明治四年  
（1871）に廃されたことが書かれています。

『会』により租税の免除された「<sup>じよち</sup>除地」であることが判ります。

<sup>いぼ</sup>疣稻荷神社について、『風』では「<sup>いぼ</sup>稻荷社」と書かれ、『郡』では書かれていません。

『会』により「<sup>じよち</sup>除地」ではないことが判ります。

「<sup>じよち</sup>庚申塔」2基、「<sup>しんぼく</sup>牛頭天王文字塔」1基。（出典『出』）

※ <sup>いぼ</sup>伝説 昔、<sup>いぼ</sup>疣に悩んだ人が、現・<sup>しんぼく</sup>疣稻荷神社のご<sup>な</sup>神木の樹皮を撫でて疣  
<sup>さす</sup>の患部に擦ると、不思議に治った人が多く、いつしか<sup>いぼ</sup>疣稻荷神社と称される  
ようになりました。治った人は、お礼参りに<sup>あぶらあ</sup>油揚げを供えます。ご神木は  
<sup>せんだん</sup>「<sup>いぼ</sup>梅檀」で、現在は<sup>いぼ</sup>切株のみです。初代は社殿の向かって左側にある切株、  
二代目は鳥居を過ぎてすぐの参道の左右に二対ある切株です。ご神木が  
<sup>だいだい</sup>「<sup>いぼ</sup>橙」との説は<sup>いぼ</sup>真偽不明のようです。

（出典 谷岡 隆夫（2011）「<sup>いぼ</sup>いぼ稻荷の木」

会報『古志賀谷』第16号）を要約。

⑬ <sup>じゅうおう</sup>十王堂：旧埼玉郡 四町野村

『風』では<sup>ぐぜい</sup>弘誓寺の持ちの「<sup>じゅうおう</sup>十王堂」であることが書かれていますが、  
『郡』では書かれていません。

『会』により「<sup>じよち</sup>除地」ではないことが判ります。

「十王堂集会所」には、閻魔大王えんまを含む十王像、奪衣婆像だつえぼ、千手観音菩薩立像（厨子に安置）、地蔵菩薩座像（厨子に安置）、不動明王像2体、不明の如来像、地蔵菩薩立像（破損）などの多くの仏像が安置されています。（出典『出』）

「庚申塔」2基。（出典『出』）

※ 寛文三年（1663）「阿弥陀如来像こうしん庚申塔」に、「地蔵院」の文字が刻まれています。（出典『出』）

#### ⑭地蔵院跡・天神社：旧埼玉郡 四町野村

地蔵院について、『風』では迎攝院こうしょうの門徒、靈瑞山六道寺れいずい ろくどうの山号・寺号、慶長八年（1603）に尊栄そんえいという僧が造立ぞうりゅう、本尊は地蔵菩薩であることが書かれ、『郡』では明治四年（1871）に廃されたことが書かれています。

『会』により租税の免除された「除地」じょちであることが判ります。

天神社について、『風』では「天神社」と書かれ、『郡』では書かれていません。

『会』により「除地」じょちではないことが判ります。

#### ※ トイレ休憩

#### ⑮愛宕社跡：旧埼玉郡 四町野村

『風』では弘誓寺ぐぜいの持ちの「愛宕社」であることが書かれていますが、『郡』では四町野村の民である会田某の持ちの「愛宕社」であることが書かれています。

『会』により「除地」じょちではないことが判ります。

※ 「太郎兵衛餅」で有名な「会田太郎兵衛家」が管理していた愛宕神社は、中町3-〇〇に鎮座していました。その後、「会田太郎兵衛屋敷」に移転し、さらに、昭和三十年代に「会田太郎兵衛屋敷」が取り壊されて住宅地になった後も残りましたが、平成十五年（2003）に取り壊されました。

（出典『出』）

⑩中町<sup>せんげん</sup>浅間神社（浅間社）：旧埼玉郡 四町野村

『風』では迎<sup>こうしょう</sup>攝院の持ちの「浅間社」であることが、『郡』では「浅間社」と書かれています。

『会』により租税の免除された「除地<sup>じょち</sup>」であることが判ります。

※ 懸<sup>かけぼとけ</sup>仏 懸<sup>ほんじぶつ</sup>仏は、神社の鏡<sup>まん</sup>や曼<sup>だ</sup>荼<sup>ら</sup>羅の月<sup>がちりん</sup>輪に由来する円形板の中に、神の本地<sup>ほんじぶつ</sup>仏を浮き彫りにしたもので、御正体<sup>みしょうたい</sup>ともいう。平安中期の神仏習合の信仰から生まれた。鎌倉期から室町期にかけて社殿等に吊り懸けられ、さかんに拝まれたことから、この名がある。[中略] 本面は、当浅間神社に祀られていた。明治維新の廃<sup>はい</sup>仏<sup>ぶつ</sup>毀<sup>き</sup>釈<sup>しゃく</sup>の際、捨てられていたものがたまたま拾われ、[中略] 平成十七年（筆者注 2005）より久伊豆神社に預け保管されている。

（出典 谷岡 隆夫（2009）「中町・浅間神社の懸仏」

会報『古志賀谷』第15号）より引用。

※ 中町浅間神社の懸仏は、直径24.4cm、木胎銅板製、表側に富士山の形が陽鑄され、裏側の木部に、以下のような墨書名があります。

「敬白<sup>みつりのり</sup>／奉納<sup>おうえい</sup> 富士山内院御正体<sup>みしょうたい</sup>／（梵字）南無<sup>せんげん</sup>浅間大菩薩<sup>こうずけすけ</sup>／上野介<sup>まごこ</sup>  
満範<sup>まんのり</sup>／別当<sup>べつたう</sup>／本云<sup>ほんぐん</sup>応永三十二年乙巳六月一日／叡蓮<sup>えいれん</sup>  
「于時<sup>とき</sup>文明八年丙申六月一日／別当中納言<sup>あじやり</sup>阿闍梨<sup>あじやり</sup>良清<sup>まごこ</sup>／満範<sup>まんのり</sup>孫子<sup>まごこ</sup>」

※ この「銘文」の「事実関係」は、以下ようになります。

①「奉納者」は、上野介 満範である。

②応永三十二年（1425）乙巳六月一日時点の、「中町浅間神社」の「別当」は、**叡蓮**である。

③51年後の文明八年（1476）丙申六月一日時点の、「中町浅間神社」の「別当」は、中納言 **阿闍梨 良清**である。

④つまり、「奉納者」である **上野介満範** の「孫子」は、51年後の「別当」である中納言 **阿闍梨 良清**である。

⑤「孫子」とは、「孫」又は「子」の意味である。

※ **上野介満範**は**野田満範**の可能性が高いようです。

奉納された富士山内院の所在は不明であるが、奉納者**上野介満範**は鎌倉府奉公衆 **野田満範**ではないだろうか。

「野田系図」（1）によると、**満範**は**上野介**で、「持氏御代始ノ時使節、**応永廿六年（筆者注 1419）**御遷宮奉成、法名**義山**」と注記がある。野田氏は『鎌倉大草紙』に「**嘉慶元年（筆者注 1387）**丁卯五月十三日、古河住人**野田右馬助**囚人一人擲進す」とあることから、鎌倉府御料所下河辺庄古河に知行所をもっていたことがうかがえる。

また、**満範**の子**持忠**は足利成氏の奏者を勤めており、おそらく成氏が古河入城したころは、古河城主であった。**懸仏**の**上野介満範**が**野田満範**であれば、**満範**は鎌倉と古河の間を往来したことは十分に考えられ、当然、利根川を航行した可能性も高い。もし、利根川流域に浅間社が勸請されていれば、浅間信仰をもった**満範**が**懸仏**を奉納したことは否定できないであろう。

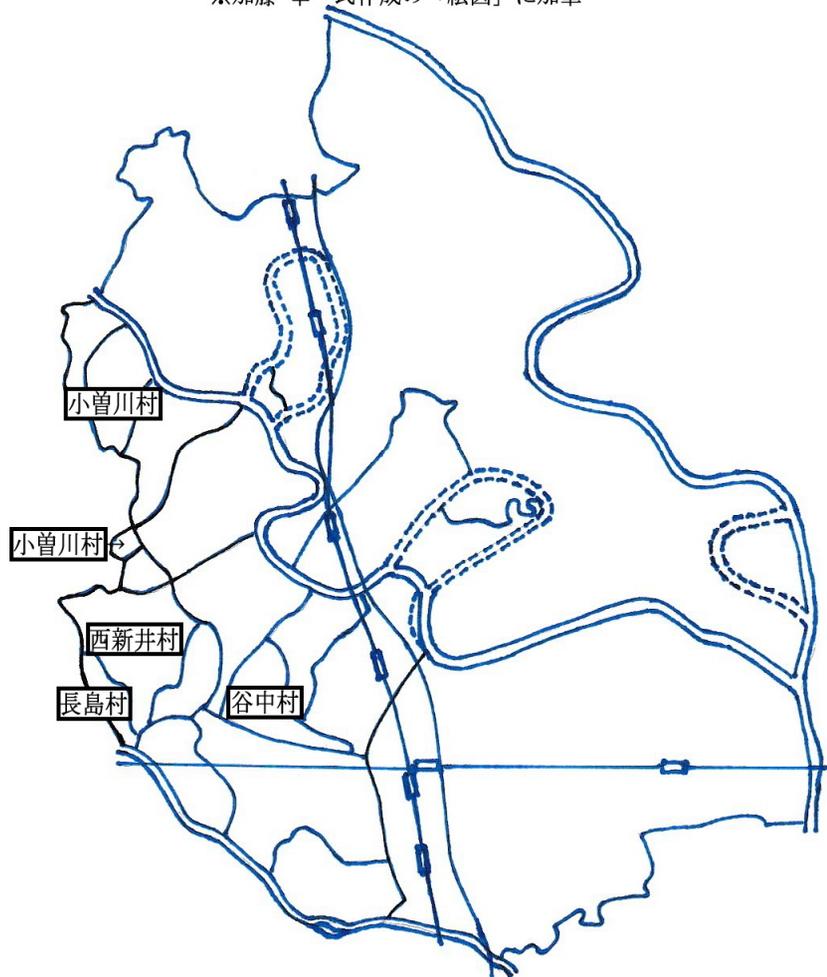
[後略]

註（1）鷲宮町編（1983）『鷲宮町史 史料編四 中世』

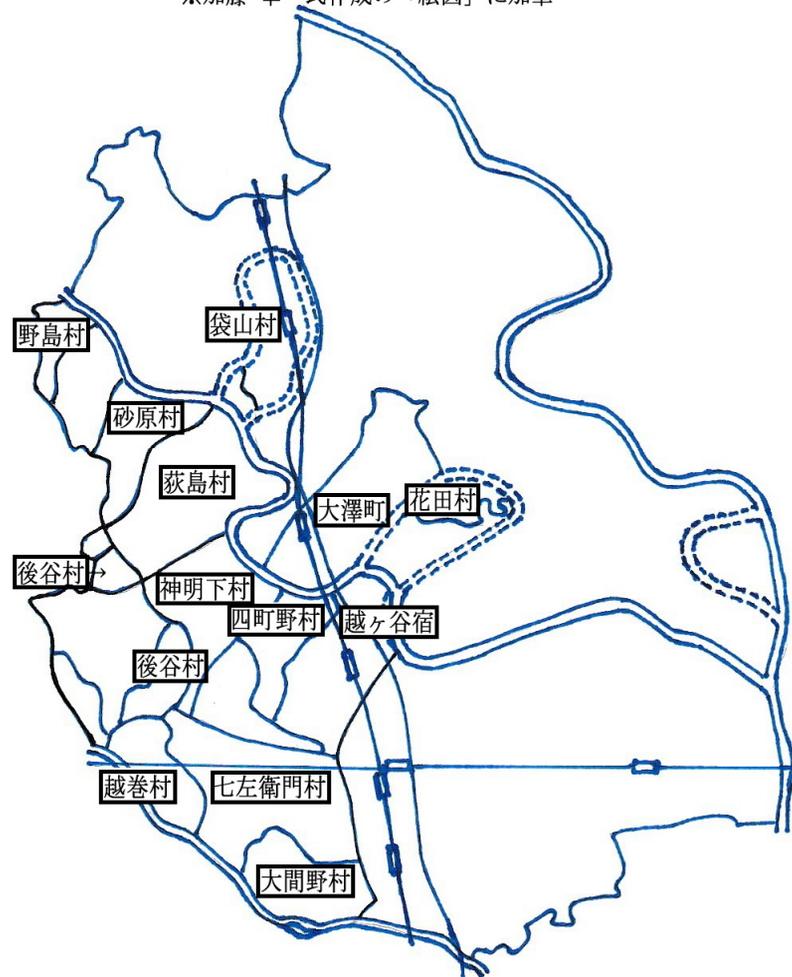
（出典 武井 尚（1993）『中川水系Ⅲ 人文』）より引用

東武鉄道「越谷駅」東口で解散 午後0時30分頃

「岩槻領(現越谷市内・元荒川右岸のみ)」の「四ヶ村」  
『新編武蔵風土記稿』[第三期]第十卷、雄山閣、1963、143～146頁  
※加藤 幸一氏作成の「絵図」に加筆

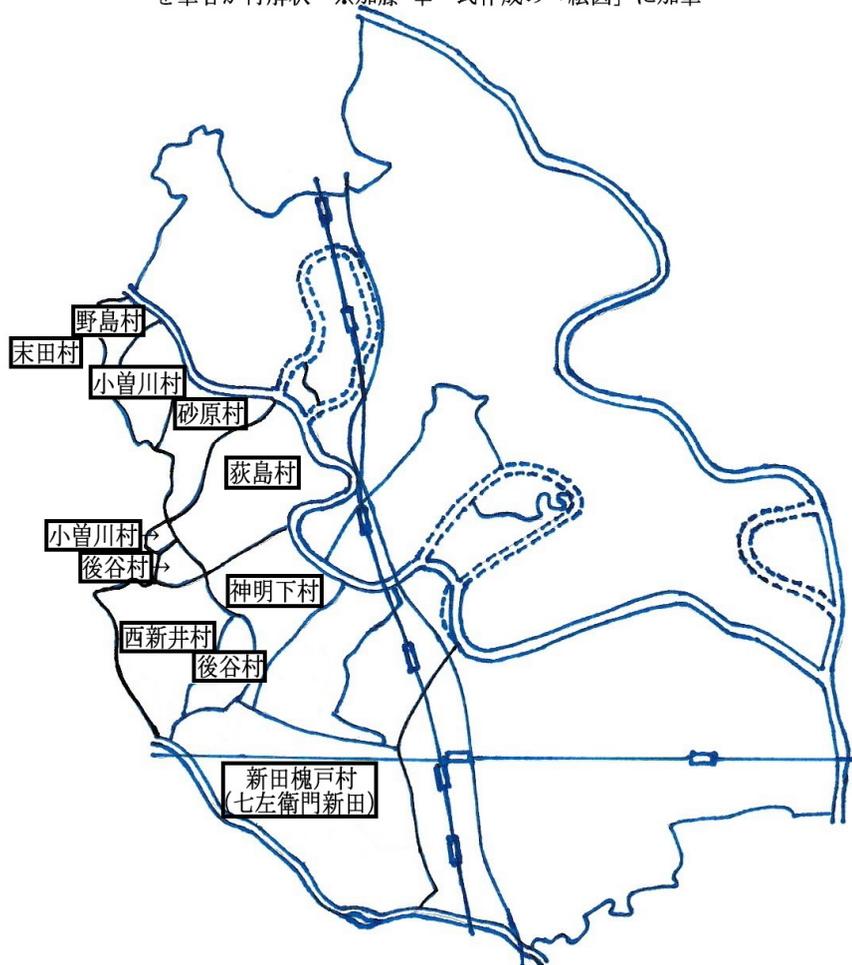


「越ヶ谷領」の「一宿一町十一ヶ村」(「寺領」を含む)  
『新編武蔵風土記稿』[第三期]第十卷、雄山閣、1963、147～154頁  
※加藤 幸一氏作成の「絵図」に加筆

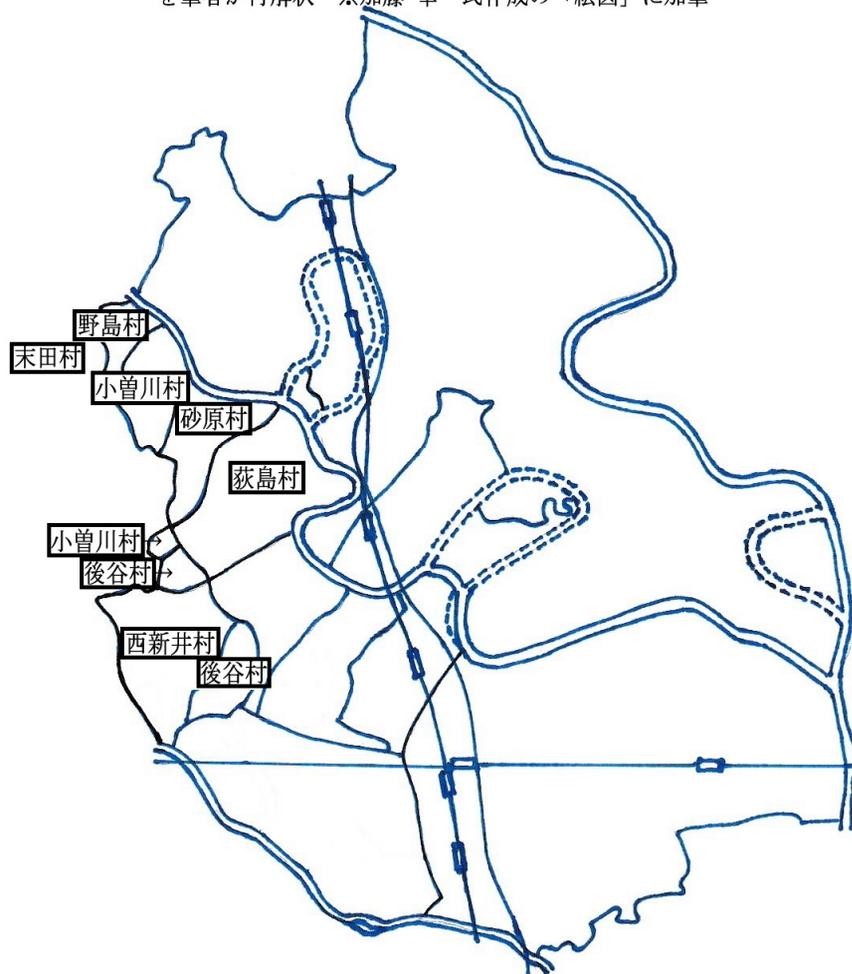


「岩槻領」の四ヶ村と「越ヶ谷領」の一宿一町十一ヶ村

「土屋領」(寛文九年(1669)六月二十五日以降)の「九ヶ村」(「寺領」を含む)  
 『土浦市史』附録、土浦市史編さん委員会編、土浦市史刊行会、1975  
 を筆者が再解釈 ※加藤 幸一氏作成の「絵図」に加筆

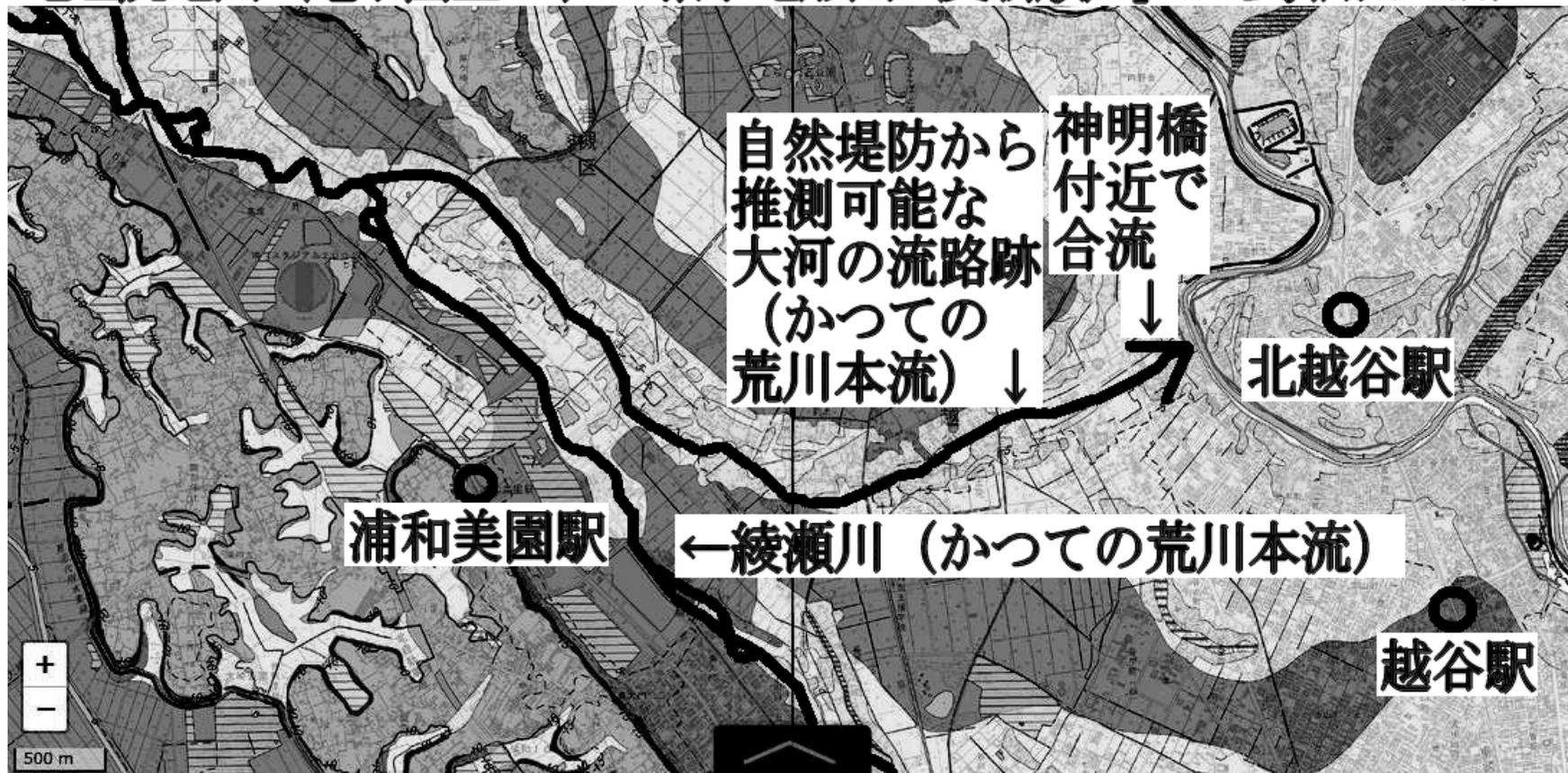


「土屋領」(寛文二年(1662)二月二十二日以降)の「七ヶ村」(「寺領」を含む)  
 『土浦市史』附録、土浦市史編さん委員会編、土浦市史刊行会、1975  
 を筆者が再解釈 ※加藤 幸一氏作成の「絵図」に加筆

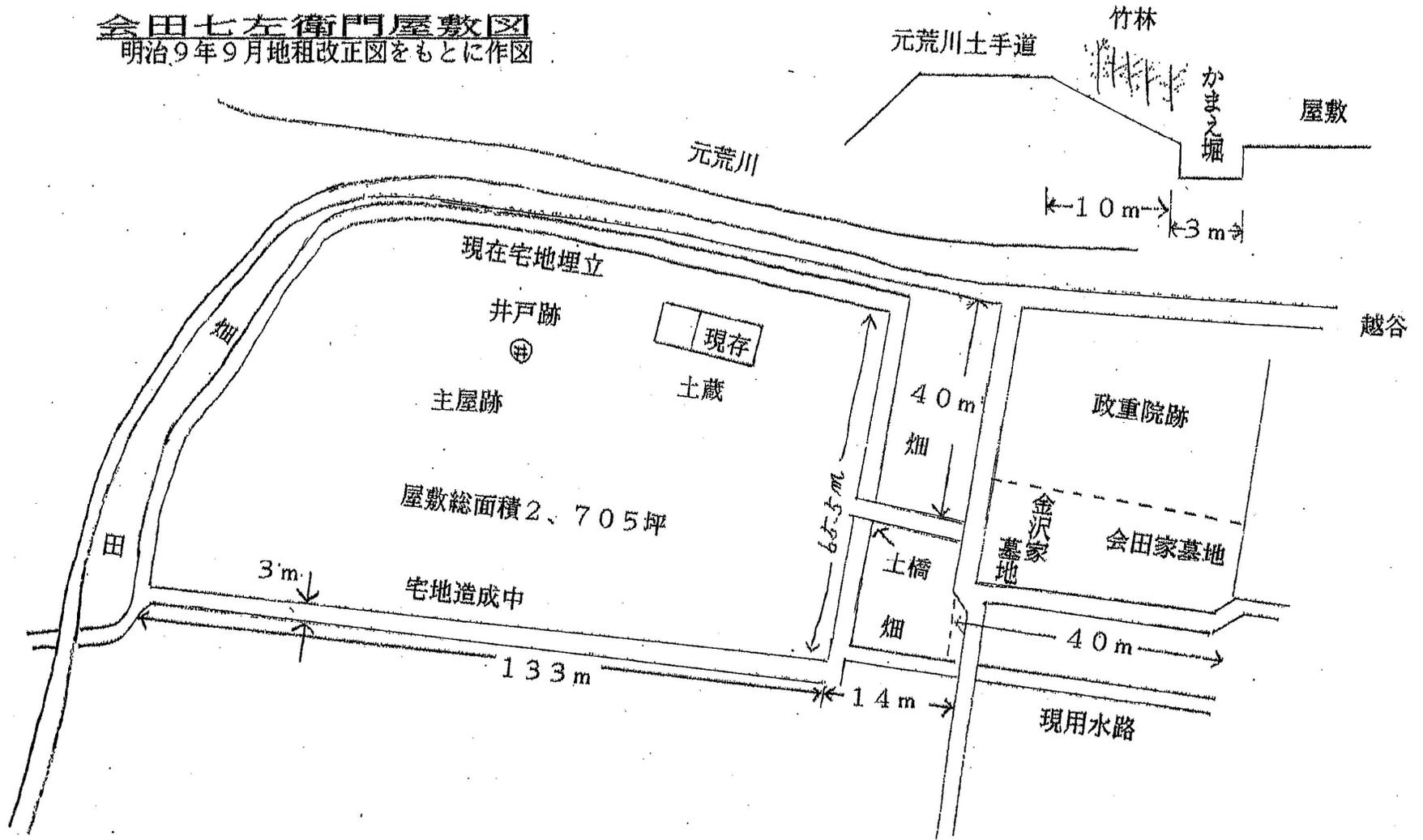


「土屋領」の変遷 (寛文九年 (1669) ← 寛文二年 (1662) )

地理院地図（電子国土Web）「治水地形図（更新版）」から引用して加工



会田七左衛門屋敷図  
 明治9年9月地租改正図をもとに作図



高崎 力氏作成の図を基に高崎 力氏からの聞き取り調査により加藤 幸一氏が作成



